



No. 279

2008. 10. 15. 発行  
あごら札幌 連絡先 011-644-2927 細田  
今月通信担当 K. S

《 今 月 の 内 容 》

- \* 江里子さんは はだしのイシャだったのです・・・1～2頁
- \* 「おひとりさまの老後」を読んで・・・3頁
- \* 女はみんな生きている・・・4～5頁
- \* 母と娘VI—母の介護を通して・・・6～7頁
- \* 情 報・・・8頁

通信購読料(年間)1200円 郵便振替 02710-3-570 あごら札幌

## 江里子さんは はだしのイシャだったのです

タカハシ ヨシエ

「あごら札幌」の紙面でも決意表明(大げさ!)しましたが、とうとうフィリピンの寒村へ行ってきました。2週間の旅です。

葉、子どもの衣服、ぬいぐるみなどの支援物資約20Kg。リュックを背負い簡易キャリバックを引きずりながらヨロヨロとマニラ空港の外へ出た。懐かしくも、あまり好きではない独特の空気がまず出迎えてくれる。そして、頼りがいのある久美さんもいつものように迎えに来てくれた。もう8度目のフィリピンなのに1人で飛行場を出たことがない。1人でタクシーに乗れないのだ。

久美さん宅に泊めてもらい翌々日、単身オロンガボへ出発。バスで3時間。さらにジブニー(改造小型トラック・・・フィリピンで1番ポピュラーな乗り物)で20分、スーパーマーケットの市場へ。そこから江里子さんのバルナバ・マタニティクリニックまでトライシクル(サイドカー付きバイク)で10分。やっと無事到着!。オロンガボでバスを降りしな、3、4人に取り囲まれ、タクシーに乗れと言われる。はじめは少額を言われ乗ったあとで、その何倍も要求されそう。きっぱり断る。それでも、そこから2分のジブニー乗り場まで荷物を1個勝手に運ばれ、20ペソも要求された!。トライシクルでも20ペソのところ、平気で100ペソ要求してくる。気を引き締めよう!旅の始まりだ!誰かに守られていると、この感覚がニブる・・・と、今回は旅行記ではないのにイントロが長すぎた!

診療所に着いて挨拶もそこそこに、昨日生まれた赤ちゃんにご対面。奇跡の朝を元気に迎えてくれた。というのも、過期のお産で、出産中に羊水や肺にウンコが入り、その量たるや深刻なもの。昨晚死んでもおかしくなかったそうです。胎内でのウンコがへばりついて、皮膚はべろべろはがれ始めているのです。ちなみに、この子の父親はジャンキー(麻薬中毒)で、毎日妊娠中の妻をなぐり、挙句の果てに女を作って出て行った、とか。・・・なかなかショッキングな「お出迎え」です。

平日は午前中に診療所を開けます。マタニティクリニックなのですが、お金の無い病人がたくさん来ます。このとき威力を発揮するのが、今回持参した、そして全国から送っていただいた「病院で処方されたが、使われないで残った薬・たち」。これらの薬でたくさ

んの命が救われているのです。さて当地でも増大しつつあるのが、生活習慣病。江里子さんの横で薬の仕分けをしながら聞いていると、タガログ語ながら、「ネスカフェや〇〇の素（化学系添加物）ばかり食べているから病気になる！昔ながらの食生活に戻しなさい！」と言っているのがよく分ります。あつという間にジャンク・フードが広がったのです。昔から米を多食しおかずは1品だったのですが、おかずがポテトチップだったり、インスタント・ラーメンになってきたそうです。カンコン・アドボ（ほうれん草に似た薬物を甘辛く煮付けたもので、私はこれが大好き）ならいいのに。それで、糖尿病や高血圧の人が増えているとか。ひとしきり「説明」をして、当分の薬を渡し、経過を見つつ、漢方薬に代えていくそうです。今回「カルテ」ができていて、再来の人は受付で「問診」をうけ、自分のカルテをもらい順番を待ちます。江里子さんはその「カルテ」を見て患者と対面し、診察し、必要なら薬を処方します。でも、正式な医者ではないので「必ず病院へ行ってくださいね」と言わねばならない時もあるのですが、「虚しい」と言います。「病院へ行くお金がある人は、とっくに行ってる」のだから。無いからここに来るのだと。つい先だって「心室中隔欠損」の2歳児が亡くなりました。もう最後のチャンスになるから手術を受けるように説得していた矢先でした。日本では比較的難しくない手術だそうです。

手術以外に回復しない、と説明しても「お金が無い」と言うばかり。両親がそれなりに努力すれば、クリニックも支援できたのに……。全く努力しないのでは支援も出来ないのです。お金と知識の無さが2歳児の命を奪ったのでしょうか。

午後からは巡回診療に出かけます。江里子さんの片腕ティナが同行します。巡回ではティナがいなければ、目指す家に行けないのです。きちんとした住所が無く、そのあたりまで行って、あとはそこら辺をティナが聞いて回ります。数日前に出産した産婦のところでは、彼女が産褥熱（40度）を起こしていました。この産婦のところへは数日後再び訪問しました。彼女は回復していたのですが、2歳の子どもが高熱で吐き続けている、というのです。事情を聞くと、虫下しを飲ませたら4~5歳の上の子はたっぷり順調に虫が出てきたのに、この子の場合、口から大きな虫が3匹出て、それからぐったりしていると。綿棒で刺激しましたがパンパンに腫れ上がった腸は反応してくれません。急いでクリニックへ戻り、浣腸、注射器、解熱剤などを持ってきました。いざとなったら、病院へ運ぶ覚悟で浣腸をしました。腸閉塞から腹膜炎になる可能性があるそうです。…しばらくしたら、そこは一面の…（私の口からは言えません）。肛門から吐き出される回虫の死体をドンドン引っ張り出しました。吐き気がおさまり、腸管音が正常に戻ったのを確認し、江里子さんもホッとした様子。子どももスヤスヤ寝てしまいました。よかった！

まだ、ほんの出だしで紙面が尽きました。今回の訪問は、ドナとの対面も重要な課題でした。4月から、貧しい（自分の努力や家族のサポートだけでは学校へ通えない）看護学生ドナの学業サポーターの1人に加えてもらいました。かつて里親として、送金のみの関わり方に反省点が多々あったので、今回はお金だけの関わりにならないようにしようと思ったのです。次回、お楽しみ？に。



## 「おひとりさまの老後」を読んで

K. S

昨年9月29日、偶然つけたNHKのラジオから面白い話が流れており、女性が1人で、2人で、あるいは家族と一緒に過ごすことについて示唆に飛んだ話を聞くことができた。最初はゲストが上野千鶴子さんと気づかなかったが、淡々とした話し方ながら結構鋭い皮肉もあり聞いていて元気が出てきた。そこで話題になっていた「おひとりさまの老後」を図書館にリクエストするも、もうすっかり忘れてしまった4月になってやっと手にすることができた。「あごろ」でも、過去この本の感想を目にしているのでも今さら紹介するまでもないと思うが、自分の身の上に照らしての感想を一言。

私はシングル歴7年目、平均余命からするとまだ三十数回春を迎えられる。というか冬を越さねばならない。ストックのないパート暮らし故、いかに暮らすかについてのハード(インフラ)は心もとなく、このままでは、「おれが死んだら年金が残るから看取って欲しい」という殺し文句につられかねない。正直な話、「おれ」が自分の基準に照らしていい男だったらおいしい話だと思う。旅や山歩きに同行してくれる達人な人間(年齢男女問わず)がそばにいれば、人生はもっとずっと楽しいものになるだろうから。

ソフト(ひとりで生きる知恵)も大問題である。家族べつたりの時間が長かったせいか、人付き合いが苦手である。と思っていたが、どうやらメンテナンスを怠らないマメさに欠け、相手への思い遣りが十分でないから友達ができないのではないかとこの本を読んで思い至った。確かにここ数年年賀状さえ書かなくなったので、数少ない友人ともほとんど途切れてしまった。これでは、上野さんのいうおひとりさまの心得(=各種パートナーの在庫くらい、用途別にいろいろ抱えておく)には程遠い。

さて、もうひとつの殺し文句といえば、「一緒に住もう！」(こちらは子どもからのお誘い)元気なうちだったらグラッとするだろう。私も、子どもが小さい時バックアップしてくれる人がそばにいる人が羨ましかったから。困って声を掛けてきたのならば、孫育ての一時期だけでも近居のため引っ越すのかもしれない。何しろシングル、賃貸、パート。身軽なことが身上である。ただし、(遠い将来)私の健康上の不安を理由とする転居、同居のお誘いならばお断りしたい。(幸いにもそのような事態は近い将来には起こりそうもない。)と考えてはいるが、何しろ最大のリスク要因は「予想できない」ことである。明日死ぬかもしれないし、50年後もまだ生きているかもしれない。身体が不自由になっているかもしれないし、認知症になっているかもしれない。(というより、そうなっている可能性の方が大きい。)だから、遺言や身の回りの整理はしておかねば…。

老いを迎えつつある私の座右の銘は、“やりたいことはできるときにやっておく”ということ。先が不確定だからこそ、今いろいろなことにチャレンジしてみたい。



# 女はみんな生きている



## 夕張の女たち

谷 百合子

夕張問題は人事ではない。無防備地域宣言署名をやった私としては、政府と地方自治体の関係を先取りしたと言う点で共通の問題なのではないかと思い、仲間と夕張に通っている。

### 市の幹部、道、政府が密室で決めた粉飾決済

夕張市の「財政破綻」は何故起きたのか？市民に全く責任がないとは言えないが、これは国政の失敗であり、夕張市民はその犠牲になったのである。戦後日本のエネルギーの花形であった石炭産業は、高炭価を嫌う資本の要求で、海外炭や石油の輸入自由化の影響を受け、合理化の嵐に見舞われていった。夕張市は、観光誘致などに踏み切り、箱物を次々と作るが失敗。ここから夕張の衰退が始まる。

2006年6月、巨額の隠れ債務の存在を新聞がスクープ。市長が財政再建団体に移行することを表明した。許せないのは、粉飾決済を繕って市民をだました関係者である。2000年度決済で道の基金から、地方債許可を得ない形で資金を借り入れ（違法行為）、「諸収入」として計上し黒字にみせかけた。道や政府の承認の上で行われたのである。市民が毎年黒字と公表される予算の中で、粉飾決済を見抜くのは困難である。金融機関は、一切リスクを負わず、夕張市の粉飾行為に手を貸し、追い貸しを続け利益を得た。

### 夕張市民再生会議

この会はもともと藤倉市長が呼びかけて始められたが、いまは完全に市民主導である。この夏には「子どもの本の集い・夕張」を開催し落合恵子さん等も訪れ盛況であった。

再生会議は「観光部門」「環境部門」「福祉部門」の3つある。私が驚いたのは3部門の座長が全員女性であった事。3部門全体の座長も女性である。私は福祉の会に参加したが、会議の進行が具体的、従って現実的、肩肘張らず、実を取っていくので、決断が早い。何人が男性もいたが、発想がそもそも違ふと見えてうなずきの紳士(?)に徹していた。その日のテーマは、独居高齢者が倒れて、救急車が来た場合、掛かりつけの医者、飲んでる薬、連絡先等を書いた黄色のポールを玄関先に設置する

為の相談であった。冷蔵庫にも必要事項を張っておくのだそうである。港区の例を参考にしたとの事であった。これから寒くなるのに、彼女たちに漲っているこのエネルギーは何なのだろうか、と感動して聞き入っていた。この3人の女性座長はフルタイムで仕事もしている。

「夕張は、女性と若者で再生するかも知れないね」と話しながら札幌に帰った。今回は10月24日の再生会議に参加する。

## イラクでの「名誉殺人」を止めさせよう

米軍によるイラク攻撃開始から2008年3月で5年になる。この間、イラク人死亡者は100万人を超え、国内外の難民は数百万人。米軍による無差別攻撃と民兵集団による住民を標的にした攻撃が激化している。米軍の戦死者も4000人に達し、自殺者も増加している。

これらの攻撃の中で、女性は危機的状況に直面している。公的なデータに依ると2008年に入ってから2ヶ月間で650人ものイラク女性が殺害されている。ディヤラの墓地で280人もの女性の死体が発見され、南部のバスラでは毎月100人を超える女性の遺体、北部のキルクでも、市内の病院8ヶ月間に取り扱った事例で300人もの女性が暴行や虐待で殺されている。理由はヒジャブを被っていない、ズボンやジーパンをはいている、大学に行っている、宗教の違う男性と恋愛をしたなどという理由である。

こうした女性への殺害は「名誉殺人」の名のもとで、父親や兄弟が大衆の面前で石でたたき殺す場合が多い。バスラやバグダッド、モスル、ディヤラでは「性浄化」「性によるジェノサイド（集団虐殺）」の段階にまで達していると言われている。

以上は2008年国際女性デー関西でイラクのリアル・アクバルさん（イラク自由会議女性局長）の報告から

## 各地で上映会を広げよう！

占領下のイラクでの「名誉殺害」を告発するドキュメンタリーフィルム「ムサワ」（平等）ーイラク女性の叫びー（45分）

連絡先      Tel・FAX      072-632-9612      OPEN（平和と平等を拓く  
私たちの絆）

## 母と娘Ⅵ



### — 母の介護を通して —

石井郁子

母が自分の立場をわきまえて、以前にも増して嫌なことを話そうとしないの  
だろうと思えた。しかし、良いことさえも自分の気持ちを表さないの  
で、私たちとの生活に満足しているのかどうか母の様子を細かく観察して推測するしか  
なかった。人に尽くすのを生きがいにしてきて、その対象がなくなったら「も  
うどうなってもいいの」と言って身をゆだねられたこちらはただ困惑するだけ  
であった。また、小さな子どもでもいたら母も気がまぎれるだろうと思えたが、  
孫は30歳を超えておりそんな状況はあり得なかった。

母との生活は雪の積った寒い冬の生活を息苦しくさせていった。そんな冬が  
終わりに近づいたある朝、目覚めると左の耳がほとんど聞こえなくなっていた。  
医者に行くと突発性難聴という病名を告げられ、原因不明の病気だがストレス  
などで発症し、早期に治療しないとそのまま聞こえなくなることもあるという。

私の場合は2週間ほどで聴力は回復したが、薬の副作用で不眠状態が続き、  
その後長く耳鳴りに悩まされるようになった。以前仕事が非常に忙しかったと  
き、がんを発症しそれは治まっていたが、その時ストレスにとっても弱い体質だ  
と実感していた。

その病気をきっかけに母が老人保健施設でショートステイを利用するよう  
になった。同時にこのまま一緒に生活をずっと続けられないだろうと思い始め、  
母のために老人福祉施設を探そうと決心した。当時も公的な老人福祉施設に入  
所するのはむずかしかった。

それから10以上の特別養護老人ホームやグループホームを見て回り、やっ  
と気に入った特別養護老人ホームを見つけて申し込みをおこなったが、そこは  
何十人も待機者がお入り入所は何年も先のことであろうと考えられた。

老人ホームに入所の申し込みをしたことで、閉塞状態からの出口を見つけた  
ような気分になったが、同時に母を見捨てるという罪の意識に悩まされるよう  
になった。だからといって母と同居する前の自由に何でもできた生活と母と一  
緒に家にいてその一挙一動を気にしながら生活する息苦しさと比べると、どう  
しても今の生活は続けられないと思う気持ちは変わらなかった。

ショートステイを利用している間は連れ合いと私はけんかもすることがなく、  
穏やかにすごしたが母が帰宅すると以前に増して二人の間の緊張感が高まって  
いった。そんな時期に利用した老人保健施設で身体障がいがある高齢者は長期

的に入所できるという話しを知った。特別養護老人ホームはいつになったら入所できるかわからなかったのも、とりあえず老人保健施設の方が入所の可能性が高いのではないかと思えてその話しを聞いた施設に入所の申し込みをした。

いつか母に施設の話しをしなければと考えると気持ちが落ちこんでいった。母が嫌だとは言わないだろうと推測できたが、私に頼りきっている母を見捨てるのだという気持ちがどうしてもつきまとった。施設入所の話をすると、予期したように私たちに迷惑をかけたくないからどこへでも行くという答えであった。しかし、母の様子を見ていると覚悟ができているためか、今すぐではないためか、そのことを気にしている様子は余りみられなかった。

その年の夏、ある日突然老人保健施設からすぐ入所できると連絡が入った。たとえ何年も待つことはないだろうと考えていたが、そんなに早く返事がくるとは思っていなかった。どうしようかと考えこんでしまったが、今回断われれば次にその機会はいつくるか分からないと告げられ結局、入所を決めた。

母にその話しをするのはつらかった。思い切って入所が決まったと告げると母もそんなにすぐだとは思っていなかった様子でショックを受けていたが、嫌とは言わず沈みこんでいた。

その施設に入ってから日曜日ごとに一緒に外出し1日を過ごし、またその合間に母を訪ねた。気持ちにゆとりができたため、一緒にいる間は家にいたときより親密に話をするようになった。そして、母は長年自分の望みを我慢して、人に尽くしてきた。そのため自分の意思を心の奥底に押し込めてしまい、やがて尽くす人がいなくなったときには、もうその意思を表すこともできなくなってしまっていたのだと気がついてきた。

やがて特別養護老人ホームへ移った母は、認知症が進行するにつれ、大声で笑ったり、歌ったりするようになった。病気になってやっと本来の自分を取り戻したのだと思うと同時に、そうできなかったその人生を考えると悲しかった。

しかし、最近、体が衰えて死が身近にせまっているのを感じてか不安そう時々、私に「怖い、怖い」と訴えて、長生きしたいと言ったりする。充足した人生を送れなかったその思いが、死を受け容れ難くしているのではないかと考えてしまう。

また、母は自分を抑えることなく、好きに生きているように見える私がそれなりに努力して幸せに暮らしていることがだんだんわかってきたと思う。ある日、施設のケアワーカーが、当惑したように名前を聞くと娘さんの名前をいうことがあるんですという。それを聞いて、母は自分の思いどおりにならなかった人生を、私の人生に重ねてしまったのではないかと考え、とうとう母も私を認めるようになったのかもしいないと思っただけで感慨深かった。

# INFORMATION

- ☆ 10月18日(土) 9:30~12:30  
第54回札幌市母と女性教職員のつどい  
「札幌市子どもの権利条例」を考える  
「権利=わがまま?!」  
講師：荒牧重人さん(山梨学院大学放火大学院教授)  
会場：北海道教育会館(札幌市中央区南3条西12丁目 011-561-6161)  
問い合わせ：母女事務局 011-561-2278
- ☆ 10月22日(水) 18:30~20:30 参加費：前売り800円・当日1,000円  
自立を支えるビジネス〜ビッグイシュー〜  
講師：佐野章二さん(㈱ビッグイシュー日本代表)  
会場：かでの2・7 520研修室(札幌市中央区北2条西7丁目)  
主催：さっぽろ自由学校「遊」(札幌市中央区南1条西5丁目 愛生館ビル)  
連絡先：011-252-6752
- ☆ 11月14日(金) 14:00~16:00 参加費：1,500円(茶菓付き)  
快療法の瓜生先生を囲んで  
講師：瓜生良介(鍼灸治療師)  
会場：喫茶「紅香」(札幌市中央区南1条西2丁目 藤井ビル 地下1階)  
連絡先：植田(070-6529-1619)、谷(011-664-0632)
- ☆ 11月15日(土) 13:00~17:00 参加費：2,000円(要予約)  
癌救急法と快療法  
講師：瓜生良介(鍼灸治療師)  
会場：札幌市教育文化会館302研修室(札幌市中央区北1条西13丁目)  
連絡先：植田(070-6529-1619)、谷(011-664-0632)
- ☆ 12月6日(土) 13:15~15:00 参加費：500円  
学習会「デートDVについて」 \*デートDVについてのDVDをみながらのお話です  
お話：長縄史子さん(アウェアデートDV防止プログラム・ファシリテーター)  
会場：クリスチャンセンター(札幌市北区北7条西6丁目)  
主催：性教協いしかりサークル \*詳細は細田(011-644-2927)まで

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

あごらの忘年会は12月13日(土) 18:00~ です。

普段参加できない人も是非来てください。(細田さん宅にて1品持ち寄り) 011-644-2927

\*\*\*\*\*あとかき\*\*\*\*\*  
冬間近、需要期を前にガソリンや灯油の価格が下がり、北国の住民はほっとしていますが、世界の経済はいよいよ冷え込みが厳しくなりそうです。

「母と娘」の連載が終わりました。その後の介護の様子が気になるのは私だけでしょうか。